

## コロナ下で協賛増やす女子ラグビーチーム 医療と共に

会員記事

野村周平 2021年2月19日 12時00分



横浜TKMの選手たちと横川秀男代表(前列中央)

女子ラグビーチーム「横浜TKM」は東日本大震災が起きた2011年、横浜市の医療法人グループが立ち上げた。設立10年を迎える今年、チームの運営体制を転換する。コロナ流行下で病院経営が苦しいなか、チームをいかに持続させるか。チームの代表で、医療法人・横浜未来ヘルスケアシステムの横川秀男理事長(64)に聞いた。

埼玉・熊谷ラグビー場で7日に行われた15人制女子の関東ラグビー大会決勝。東京山九フェニックスとの合同チームで臨んだTKMは20—25でアルカス熊谷と自衛隊体育学校の合同チームに敗れた。ラグビー経験のある横川氏は終盤に猛追した選手たちの姿を目に焼き付けた。

「あと1時間試合をしたら勝てたんじゃないかな。そう思うくらい頑張ってくれた。最後まであきらめなかった。猛練習しているから、こういう試合ができるんだと思う」

この夏で結成10年。15年に亡くなった元慶大ラグビー一部監督の上田昭夫氏が創設期、ゼネラルマネージャー兼監督を務めた。15人制W杯の日本代表や東京五輪の7人制代表候補にも選手を送り出す存在になった。

「このチームがあっけよかった。あの時、決断ができてよかった。そう思います。上田さんをはじめ、皆さんの力を借りた。大震災の年だったから、少しでも社会の力になればと。元々は、ラグビーと医療の精神が一緒という発想から。みんなで体を張り合ってゴールを目指す。最高の医療を目指す過程も同じです」「10年かけて、少しでも社会に貢献できているのかなと思う。私たちだけでなくみんなで、女子ラグビーを通じたラグビーの発展や、スポーツを通じた社会の活力を高めるための一つの原動力になってくれた。今思えば、女性活躍推進の時代に女子のチームを作ってよかった」

日本ラグビー協会によると、女子の登録は11年度末の32チーム、2446人から19年度末には72チーム、5082人に。ラグビー全体の競技人口が減るなかで、大きく増えている。

↓ ここから続き

「今日の試合にしても、本当は自分たちだけのチームで出たいと皆が臨んでいる。まだまだ人数が足りない。医療をやりながらラグビーすることを重圧に感じる選手もいる。だから、最初はうちで働いている選手だけでしたけど、今は学生やほかの仕事をしている選手も受け入れるクラブにしました。ラグビーをやりたくても場所がない、という選手がいますから」

病院経営はひっばくしている。スポーツは不要不急とも言われる。「病院経営は大変です。新型コロナ患者の受け入れ。クラスターになったらどう乗り越えるか。この1年はそんなことばかりをやってきた。うちは介護施設もある。コロナ下で今まで以上にコストはかかるし、赤字の病院も多い。そんななかでどうこのチームを継続させるのかを考えた」。存続の危機に、昨春からチームを運営する一般社団法人を立ち上げ、女子ラグビーの活動を通して、地域社会と結びつく理念をより鮮明にした。

「正式には来年度からですが、会社や個人のスポンサーは増え、横浜市もふるさと納税制度を活用して支援してくれるようになった。ファンクラブも作った。この10年目をきっかけに社会に開かれた、みんなに親んでもらえるチームにしたい」

「今日の試合もハイライトシーンを支援してくれる方に送る。本当は応援に来たい人も今は無観客開催が多くて試合に来られません。選手たちの頑張りを、活力にしてほしい。女子ラグビー、ひいてはラグビー界のためにも、どんなことをしても乗り越えなきゃいけないと思っている」

努力のかいあって、ファンクラブ会員は175人、協賛社は34に(2月初旬時点)。チームの運営予算も切り詰めた。来年度からは選手の勤務時間を増やし、ラグビーに使うと計算される経費を約半分に減らすよう努力するという。

「選手は不安だと思います。今まで通りがいいでしょう。でも、ラグビーを続けられる場所があることが大事と言ってくれた。選手自身が、応援してくれる企業を訪問してくれる。彼女たちはつらいストレスの毎日の中で、試合もない、先も見えない中で練習してきた。その過程が今日のように試合に込められる。私は今の時代、スポーツこそなければいけないと思います」

東京五輪に代表選手を出すことはチームの目標の一つだった。その五輪には今逆風が吹き荒れる。「TKMの目標は五輪に代表選手を出すことだけではない。みんなが一つになって社会に活力を与えるだけでも十分です。でも、五輪やW杯という目標があると、選手たちはそこに向かえる。無観客かもしれないけど、開催してほしい。私は間違いなくやってほしいと思っています」

この試合限りで引退した元日本代表FWの三村亜生(あおい)(31)はバスケットボールを大学まで16年やった後、TKMでラグビーに9年間取り組んで15人制W杯にも出場した。横川氏は、そんな選手たちのセカンドキャリアも考える。

「選手の多くは事務職ですが、引退後に看護学校にいたいと思っている選手はいるので支援したい。三村さんは介護福祉士の資格をとった。ラグビーや仕事をしながら、勉強できる環境を整えたい。もっとみんなが各職場で応援され、このチームがあっけよかった、とってくれる存在にしていきたい」(野村周平)